

生れて、
すみません。

死を賭けた言葉の虚構

長野 隆

(弘前大学助教授)

「沈黙は金なり」の雄弁に倣うまでもなく、言葉は現実を裏切りやすい。有名な「ペーターと狼」の寓意は、そうした言葉の危うさを、いわば無効性という罪を課すことで突こうとした。言葉は嘘も信じさせる魔力をもつが、いったん嘘を暴かれた言葉は、無言以下である、と。もはや言葉は現実＝事実を再現するどころか、悉くそれを裏切る。ペーターの悲鳴は、どこかで無実の罪人の叫びに通じている。

『人間失格』のなかで、心中未遂の末、相手の女だけを死なせた主人公が、検事の取調べを受ける折、咄嗟に思い付いた價の咳を見破られ、冷汗三斗の思いをする場面がある。肺を患っている主人公が、確かにその場で襲われた咳であったにも関わらず、つい同情を買おうとして付け加えた余分な咳を検事に見破られたのだ。最初の咳は本当の咳だったが、

そのあとの咳は偽装だった。その嘘がばれたために、本当の咳まで疑われるはめになった。つまり、事ここに及んで、彼は真実を真実として提出する術さえ、いや、それが真実であったことを証明する術さえ奪われてしまったのだ。口にすればするだけ、反って疑わしきが増すばかり。言葉が、全く「言うことをきかない」のである。

「ペーターと狼」ならぬこの挿話は、むしろ太宰の来歴を彷彿とさせるばかりでなく、早くはその初期作品「あさましきもの」にも取られ、実話に相違ない手応えを与えている。或いは「一つの約束」という中期のエッセイに、こんな譬話もある。——難破して、身は怒濤に巻き込まれ、海岸に叩きつけられ、必死にしがみついた所は灯台の窓縁。命からがら助けを求めて叫ばんとし、窓の内を見ると、今しも灯台守一家の慎ましくも幸せそう

な夕食の最中。男はこの光景を前にして、一瞬声を失い、行為に戸惑い、ついに後から押し寄せてきた大波に吞まれて、その姿を消す。

太宰はそこで、この男の行為に触れ、それは誰も見ていないが、ありうる事実である、と言う。そして「そのような事実からこそ、高貴な宝玉が光っている場合が多い」と。だから、この「美談は決して嘘ではな」く、現に今、自分によって「事実として、語られ」ており、ここに、作家の「幻想の不思議が存在する。事実が小説よりも奇なり」と結ぶ。

この譬話もまた再三「雪の夜の話」や「惜別」などの作品に挿み取られ、いわば、彼自身が身を乗り出して説くもう一つの実話——（先のとは逆に）嘘でしか発見しようのない事実、誰かが口言葉にしなければ何ら浮かべられることのない真実、の在ることが指摘される。

私がこれらの話に興味を持つのは他でもない。太宰治の「表現」とは、まさにそのような場所から開始されたということ——事の真偽に纏る強い必然性と、その必然性とは裏腹に現実＝真実はいかにも再現が難しいという不毛なあらがいのなかに、彼が欲しようとした言葉と、その言葉がすすんでみずからの位相を探し求めた、「へかたり」の特異さの一切があったように見える。二つの話は、いわば「神の不在」をめぐる、事の「真偽」に関する世の審判と、語り、語られる「言葉」に対する信・不信を、正誤両面の現実を向き合わせることで逆説的に突いており、その上でなお、それを「へかたる」自分というものの存在のあること、その拭い難い存在の現に在ることの何たるかが問い質されている。そしておそらくは、前者のような「実話らしき」話の核となる事実＝現実の明証のために自ずから後者のような寓話が必然となり、いや、そんな順序はどうであれ、このとき、私たちの知る太宰治という「へかたり」の総体が必然となったはずである。

このように見ると、太宰治の「へかたり」の始まりは「一人称の悲劇」と呼んでいいのかもしれない。「一人称の喜劇」でもいい。自己

がそれ「自己」を語らなければ、何一つ明らかではなく、自己がそれ「自己」を語るかぎり、何一つ信じてはもらえない。いわば、彼は、語りながら、それを語っているのが自分であることに腹を立てなければならなくなる。これは、自己を「へかたる」ことを余儀なくされた者の、その「へかたる」自己があるがゆえの悲劇である。しかも、自己がそれを語っているかぎり、語る自己を抹殺することなどできようはずもない。

「一人称の悲劇」は、ここでどうやら、表現形式へ「かたり」の悲劇だけではなく、表現内容へ「思想」の悲劇まで迎え入れなければならなくなったようだ。それは、言ってみれば、私小説を誰よりも必然のものとしながら、初めからこの形式の破壊に向かわなければならなかった、太宰という「表現」の水準の何たるかであり、またそうした小説をして、自己が「かたること」の真偽や正否を、読者の側における「信」の審判に委ねることもあった。「信」の審判に委ねるとは、どういうことか？

先の最初の話の例に沿ってみると、一度嘘を見破られた人が、それでもなお、その嘘とは違う己れの真を信じてもらうために、いか

にも嘘をつきやすい己れ自身を再度提出して、いわばその告白の真のようなものを信じてもらうことだろう。「私は嘘つきです」という具合に。語りの内訳を信じてもらうのではなく、語り手そのものを信じてもらうこと——それゆえ彼は、その「信」を獲得するために、みずからの嘘を、語るその場その場で悉く裁いて行くように努めなくてはならない。だが、自己が自己を裁くなど、これほど鼻持ちならぬ現実もなく、であればこそ必然的に、あの自嘲と含羞を引き出さずにはおかないのだ。しかも、これらはすべて、心理的な循環命題であり、同時に併行課題でもある。

自他を打ちながら、これに詫び、これに同情しながら、なお許さぬ姿勢を保つこと——要するに、倫理の節操を踏むこと——これが、太宰の表現が辿ろうとした、思想と呼べるものの骨格であり、文学のあらましではなかったか。その文学＝表現が、自ずからその姿勢を極められるところで、今度は、彼自身の「死」＝無言を、言葉＝雄弁の代替としなくてはならぬのは、必然の成り行きにある。いや、それこそ、文学＝表現（遺言）の出発であったように見える。